

## 凡例

### A 底本について

一、底本には日本芸術文化振興会所蔵の初摺本を用いた。正編の二冊が【6433・6434】、拾遺の二冊が国立文楽劇場所蔵の【13202 特-26/01・13203 特-26/02】である。なお、拾遺については、国立文楽劇場所蔵の明治期の後摺本【13200 特-25/01・13201 特-25/02】も合わせて参照した。

### B 文字処理

一、漢字は通行の字体を用いることを基本とした。俗字・同字・異体字・通用字・古字等は、音義が同じで、その字体を改めることで意味の違いを惹起しないと考えられる場合、もっとも代表的な字体に改めた。

例…富↓富 靄↓鶴 寫↓嶋 舛↓升 寐↓寢 粹↓粹 脊↓背  
舩↓船 瀧↓滝 條↓条 欄↓欄 杵↓杉 處↓処 躰↓体  
雙↓双 髻↓鬢 畧↓略 菴↓庵

一、以下の字体については、字義および文献内の文字意識の違い等を考慮し、原本どおりの用字を残した。

例…嶋・島 燈・灯 鼓・鼓 龍・竜 鎗・槍 銚・銚 澗・淵 鬢・鬢

一、省文は、当該文脈中において正しい字義を担うと考えられる字体に改めた。

例… 广 ↓ 磨

一、清濁は原本のままとし、私に濁点・半濁点を施さなかった。ただし、濁点の位置のズレなど、明らかな誤りが認められる場合は、校者の判断で修正した。

一、「ハ」「ミ」「ニ」は原則として平仮名とみなした。また、接続助詞として用いられる「而」は「て」に改めた。

例… ニ 而 ↓ にて

一、疊字は「々」「ゝ」「ゞ」「く」「ぐ」を用いたが、「と」は「々」に改めた。

一、句読点を適宜補った。また、単語が並列され、意味内容上、ひとつのまとまりがあると判断できる場合には、適宜「・」の記号を用いて通読の便を図った。

一、底本に明らかな誤りがある場合には、原本の形をそのまま残し、それが誤植ではないことを示すため、(ママ)と傍記した。ただし、漢字の音が通じる場合には、煩雑を避けるため不問に付した。

例… 部家 義式 ↓ 正しくは「部屋」「儀式」であるが、音が通じている

ためそのまま残した。

一、底本に明らかな脱字がある場合は、予想される文字を「」で囲って該当箇所に入れた。

例… 舞台のまへ「ゝ」出

一、底本の欠字や判読不能な文字については、その字数分を□で表した。

## C レイアウトについて

一、原本では、図版と、それに対応する文章とが離れた位置に配されており、通読や参照に不便な面があった。服部幸雄氏による旧版の翻刻『歌舞伎の文献・5 戯場楽屋図会』（国立劇場調査養成部・芸能調査室）も同様である。そこで今回の翻刻では、敢えて原本の体裁を崩し、関連性の深い図版・文章同士を極力近接させて掲出した。原本の本来の掲載順を確認したい場合には、影印を参照せられたい。

一、原本において見開きで展開される図版については、右図と左図とを接合し、中央の枠線を消去して自然な形で鑑賞できるように調整した。

一、図版に文字が入る場合は、文字の大きさや行移りなどは原本の趣きを再現したが、通読の便を考慮し、原本において右から左に記される文字列を、今日の慣習に従って左から右に直すなどの変更を施している。

一、正編下巻の第六丁表の図版（「東西奥場図帳之写」）については、見やすさを考慮し、本来の縦長の形状から、九十度寝かせた横長の形状に変更して掲出した。それに伴い、文字列も、一部、縦横の向きを変更している。

一、文章部分のレイアウトは、原則、原本の行移りを崩した。ただし、各編の序文や凡例、巻頭の目録など、原本に忠実に文字を配した丁もある。

一、丁付は、各編の序文や凡例、目録、見開き一面で掲載される図版など、原本のレイアウトに忠実な丁については、画面の右ないし左に、それ以外の丁については該当する文章の末尾に（ ）で示した。原本の丁付と実丁数の示し方は以下の通りである。

例：（上巻一2オ）↓「上巻一」が原本の丁付、「2オ」が実丁数第二丁の  
表面であることを示している。

（拾上ノニ5ウ）↓「拾上ノニ」が原本の丁付、「5ウ」が実丁数第五  
丁の裏面であることを示している。